

# コールリッジにおける愛の消去

——‘Work Without Hope’覚え書き——

蜂 谷 昭 雄

You will see Coleridge—he who sits obscure  
In the exceeding lustre and the pure  
Intense irradiation of a mind,  
Which, with its own internal lightning blind,  
Flags wearily through darkness and despair—  
Shelley (1820)

## WORK WITHOUT HOPE

LINES COMPOSED 21ST FEBRUARY 1825

All Nature seems at work. Slugs leave their lair—  
The bees are stirring—birds are on the wing—  
And Winter slumbering in the open air,  
Wears on his smiling face a dream of Spring!  
And I the while, the sole unbusy thing,  
Nor honey make, nor pair, nor build, nor sing.

- 
- 1) あなたはコールリッジにお会いになるでしょう—自らの内なる稲妻に撃たれて  
盲いて、暗闇と絶望の中を大儀によりよると進む精神の、あまりの輝きと純粹  
で強烈な照射の中にかすんでしまって坐っているあの人を—

## 2 コールリッジにおける愛の消去—‘Work Without Hope’覚え書き—

Yet well I ken the banks where amaranths blow,  
Have traced the fount whence streams of nectar flow.  
Bloom, O ye amaranths ! bloom for whom ye may,  
For me ye bloom not ! Glide, rich streams, away !  
With lips unbrightened, wreathless brow, I stroll:  
And would you learn the spells that drowse my soul ?  
Work without Hope draws nectar in a sieve,  
And Hope without an object cannot live.

コールリッジは1828年に *The Bijou* 誌上に ‘Work Without Hope’ と題する一篇のソネット（押韻からすれば正規のソネットとはいえない）を発表したが、その原型は1825年2月21日の日付けのあるノートブックに認められる30行余りの未完の詩の一部である。G.M. ホプキンズ（Hopkins 1844—89）は、その最後のソネットの一つ ‘Thou art indeed just, Lord,...’（1889年3月）を作ったとき、このソネットを知っていたであろうと、ハンフリー・ハウス（Humphry House）<sup>1)</sup>以来考えられているが、ハウスはそれ以上に、両詩人の本質的な類似点に注意を促している。例えば「コールリッジとホプキンズの情況には似たところが多い。両者とも病弱と孤立感と創作衝動の挫折に悩み、両者とも未完に終わった多くの作品を計画したり、着手したりした。両者とも…詩的創作力を彼らの学殖や、哲学への技術的関心と関係づけようとした」(p. 139)。ここではコールリッジとホプキンズのソネットを比較するのが当面の目的ではないが、詩そのものとしては、神を難じつつ訴えるホプキンズの方に、はるかに緊迫した力があり、コールリッジのものは阿片中毒者のくり言めく点さえ見える。ホプキンズの「靈魂の暗夜」(*La noche oscura del alma*) は短い一生の末の、果たされなかった神秘家の神との合一 (*unio mystica*) の、中断された行程であったのに対し、コールリッジの長すぎた夜

---

1) 例えば H. House, *Coleridge*, 1953. M. Suther, *The Dark Night of Samuel Taylor Coleridge*, 1960. G. Yarlott, *Coleridge and the Abyssinian Maid*, 1967.

はどう見ればよいのか、単に麻薬患者の辺獄 (Limbo) 的な夢ではすまされないものがある。まずその原型を、詩の前書きの標題を含めて、ノートブックから全文記してみる。<sup>1)</sup>

*Notebook No. 29, p. 168*

Strain in the manner of G. HERBERT, which might be entitled THE ALONE MOST DEAR : a Complaint of Jacob to Rachel as in the tenth year of her service he saw in her or *fancied* that he saw symptoms of Alienation. ~~N.B. The Thoughts and Images being modernized and turned into English.~~

(*It was fancy*) [Pencil note by Mrs. Gillman.]

All Nature seems at work. ~~Snails~~ Slugs leave their lair;  
The Bees are stirring; Birds are on the wing;  
And Winter slumb'ring in the open air  
Wears on his smiling face a dream of Spring.  
And  
~~But~~ I the while, the sole unbusy thing.  
Nor honey make, nor pair, nor build, nor sing.  
Yet well I ken the banks where Amaranths blow  
Have traced the fount whence Streams of Nectar flow.  
Bloom, O ye Amaranths ! bloom for whom ye may—  
For me ye bloom not ! Glide, rich streams ! away !

? *Lip unbrighten'd, wreathless B.*

With unmoist Lip and wreathless Brow I stroll;  
And would you learn the spells that drowse my soul ?  
Work without Hope draws nectar in a sieve;  
And Hope without an Object cannot live.

I speak in figures, inward thoughts and woes  
Interpreting by Shapes and outward shews:

---

1) E. H. Coleridge(ed.), *The Complete Poetical Works of Samuel Taylor Coleridge*, vol. 2, p. 1111.

{ Where daily nearer me with magic Ties,  
 { What time and where, (wove close with magic Ties  
 Line over line, and thickning as they rise)  
 The World her spidery threads on all sides spin  
 Side answring side with narrow interspace,  
 My Faith (say I; I and my Faith are one)  
 Hung, as a Mirror, there! And face to face  
 (For nothing else there was between or near)  
 One Sister Mirror hid the dreary Wall,  
 But *that* is broke! And with that { bright compeer  
 { only pheere  
 I lost my object and my inmost All——  
 Faith *in* the Faith of THE ALONE MOST DEAR!

JACOB HODIERNUS

Ah! me!!

Call the World spider: and at fancy's touch  
 Thought becomes image and I see it such.  
 With viscous masonry of films and threads  
 Tough as the nets in Indian Forests found  
 It blends the Waller's and the Weaver's trades  
 And soon the tent-like Hangings touch the ground  
 A dusky chamber that excludes the day  
 But cease the prelude and resume the lay

ジョージ・ハーバートぶりの調べ。「ただひとり最もいとしき人。ヤコブがラケルに仕えて10年目、彼女によそよそしさの影を見た、あるいは見た気がしたときの、ヤコブからラケルへの哀訴」とでも題すべきもの。注：思想と心象は現代化され、英語に移されている。

(気のせいでした) [ギルマン夫人の鉛筆での書き込み。]

全自然が働いているようだ。かたつむりなめくじもねぐらを棄て、  
 蜜蜂は活動し、小鳥は飛び交う。  
 そして冬は野外にまどろみながら、

春を夢みて笑顔を浮かべている。

七か七そしてその間も、私はただひとり安閑として  
蜜も作らねば番<sup>つが</sup>いもせず、巢も営まず歌いもしない。

それでも私は不凋<sup>アンペラリス</sup>花の咲く土手をよく知っており、  
神酒<sup>モフター</sup>の流れの湧き出る霊泉を究めたことがあるのだ。

咲くがよい、汝ら不凋花よ。汝らが誰のために咲こうと、  
私のために咲くのではないのだ。豊かな流れよ、流れ去れ。

(? 昏も輝かず、花かずらもなきひ<sup>たい</sup>)

昏をうるおしもせず、額に花かずらも戴かず私はさまよう。

そしてあなたは私の魂を眠らせている呪<sup>まじ</sup>いを知りたいか。

望みなき仕事はざるに神酒を汲み、  
対象を失った望みは生きておれないのだ。

私は譬えて語っており、内なる思いと悲哀を  
形象と外なる表われで捉え直している。

そこでは日ごとに魔法の絆で私に迫りながら、  
そこでは(びったりと魔法の絆を織られて、

糸に糸を重ね、上になるほど密に)

世界はくもの糸を四面に紡いで、

狭い空隙で面と面とが応じている時と所で、

私の信は(「私は」と言え。私と信とは一体なのだ)

鏡の如くにそこに掛かつていたのだ。そして向かい合わせに  
(間にも近くにも、他には何もなかったから)

一枚の妹分の鏡が荒涼たる壁面を隠してくれた。

だがそれも割れたのだ。そしてその { 輝かしい仲間とともに  
唯一の伴侶とともに

私は対象も、内奥のすべてをも失ったのだ――

ただひとり最もいとしき人の信への信を。

現代のヤコブ

悲しいかな。

世界をくもと呼ぼう。すると空想のひと触れで、  
思想は心象となり、そのようなものと見えてくる。

薄膜と、インドの森に見られる網のように  
強靱な糸との粘<sup>ねば</sup>つく建築で

世界は左官と織屋の仕事を兼ねる  
 すると間もなくテントのような垂れ幕が地面に触れて  
 日の光を閉め出すうす暗い寝室となる  
 だが序奏はやめて歌を再び始めよう

この詩がハーバートぶりを称しているのは興味を引く点だが、ハーバートこそ、カトリックへの回心を決意したのちのホプキンズになおも英国国教会に後髪を引かれる思いをさせた最も強い絆であったのだ。このことはホプキンズをコールリッジと繋ぐだけでなく、更にハーバートにまで遡る太い糸の存在を感じさせるが、これも今は深入りしない。ただ、コールリッジの編者である E. H. コールリッジが典拠を誤ってハーバートの “Praise” (I) に求めたために、ジョージ・ワトスンのように、それをう呑みにして、内容的に何の関係もないと断言する人もいるが、その他の諸家が正しく指摘しているように、“Employment” (I) がその典拠となっている。コールリッジのハーバートへの讃辞（その当時としては珍しい卓見である）は『文学的自伝』第19章にも見られるが、1818年12月6日付けのウィリアム・コリンズ（王立美術院会員）宛ての手紙にも次のように述べている。

……若い頃はその珍奇さで自分を楽しませるために読んだものだった敬虔なジョージ・ハーバートの詩に、今ではミルトン以後のすべての詩を足したよりも多くの、実質的な慰めを見いだしています。

更に1826年3月（コールリッジは例の不注意から4月としている）18日付けのレイディ・ボーモント宛ての手紙でも、ハーバートの詩「対話」(魂と救い主との) が与える慰めについて書いているが、この同じ手紙の書き出しがまた、上の「望みなき仕事」とそっくりの感懷を述べているのが興味深い。

1) G. Watson, *Coleridge the Poet*, p.138.

2) Letter 1159.

3) Letter 1524,

私はこのところ私の健康の、というより不健康の、水準をさえ情なくも下まわっており、そのことから、年ごとのこの、冬の眠りからの自然のよみ返りの中で、若葉や花や、さえずりつつ巣を営む小鳥たちのさ中にいて、太陽はそんなにも喜ばしく、そよ風はそんなにも翼に癒しを運び、あらゆるうるわしいものが私の上にも下にも、まわり到るところにもある——しかもすべては神から——のに、私のそれらを享受することの無能力、せいぜいそれらを受けつけることの億劫さは、直接にせよ間接にせよ私自身から、過去のぐずつきから、そして苦痛に対する臆病な我慢のなさから来るのだという意識のために一そう気が減入るのです。

ホプキンのソネットは3月17日の日付けだったが、この手紙は3月18日、そして「望みなき仕事」が「春を早まったこの暖くうらかな」2月21日であったことから、身体的不調と精神的渇渴感到悩む詩人にとって、自然のよみ返りの季節というものが、どれほど刺戟的で、耐えがたいものであったかを示していよう。そういえば、‘psycho-somatic’ という20世紀的な造語<sup>1)</sup>を1世紀早く発明したのは他ならぬコールリッジであった。

ところで本題の詩に戻ると、1825年といえはコールリッジが自身の健康管理のために、ハイゲートの医師ジェームズ・ギルマン(James Gillman)宅に居候する恰好で、医師夫妻の世話になり始めてから、すでに10年目である。この詩の前書きに “It was fancy” というギルマン夫人の書き込みがあるのは、この詩がギルマン夫人に示すべく書かれたように見えるために、キャスリーン・コーバーン(Kathleen Coburn) は「ヤコブのラケルに対する、とは明らかにコールリッジのギルマン夫人に対する、のこと」と注しているほどである。<sup>2)</sup>それにはコールリッジの前書きの “in the tenth year of her<sup>3)</sup> service he...fancied that he saw symptoms...” という文言にも責任がある。彼女は “her service” を「彼女の(彼に対する)世話」と取ったのであろうか。

1) W. J. Bate, *Coleridge*, p. 103.

2) K. Coburn, ‘Reflexions in a Coleridge Mirror’ (in Hillis & Bloom(ed.) *From Sensibility to Romanticism*, p.423n.)

3) ワトスンが誤って “his service” と書いているのも無理はない。Op.cit. p.138.

もちろん、ヤコブがラケルに仕えたのであってその逆ではない。夫人は創世記29章の記事をどう受け取っていたのだろうか。しかしそこには、ヤコブはラケルを妻とするため、その父ラバンに7年仕え、欺かれて、更に7年間仕えたとはあるが、10年目にラケルの態度がよそよそしくなったとは書いてない。試みにポルトガルの国民詩人ルイス・デ・カモンエス(Luis de Camões, 1524—80) のヤコブのラケルへの愛を歌ったソネットを見よう。

Sete anos de pastor Jacob servia  
 Labão, pai de Raquel, serrana bela,  
 mas não servia ao pai, servia a ela,  
 que a ela sô por premio pretendia.  
 Os dias na esperança de um só dia  
 passava, contentando-se com vê-la:  
 porem o pai, usando de cautela,  
 em lugar de Raquel lhe deu Lia.  
 Vendo o triste pastor que com enganos  
 assi lhe era negada a sua pastora  
 como se a não tivera merecida,  
 começou a servir outros sete anos,  
 dizendo: Mais servira se não fora  
 para tam longo amor tam curta a vida!

羊飼いとして七年の間ヤコブは  
 うるわしい山娘ラケルの父ラバンに仕えた。  
 だが父にではなく、彼女に仕えたのだ。  
 その人ひとりに酬いられることを求めて。  
 ただ一日を待ち望んで日々を過ごし、  
 彼女を見るだけに満足していたのだった。  
 だが父親は遠謀を用いて、  
 ラケルに代えてレアを彼に与えた。

1) *The Oxford Book of Portuguese Verse* (ed. A. F. G. Bell) による。 *Obras Completas*, vol. 1 (Sá da Costa) では Soneto no. 15.



悲しみの羊飼いはこのようにたくらみによって  
まるで彼自身、彼女に価せぬものの如くに、  
意中の女羊飼いが拒まれたのを見ると、  
さらに七年を仕え始めたのだった。  
かくも長き恋のためには人生がかくも短かすぎる  
のでなかったらもっと仕えるものを、と言いながら。

これによると、14年を経てからラケルを得たように見える。(創世記では7年ののち、いつわって姉嬢のレアを妻に与えられるが、7日間の婚礼をすませると、ラケルを与えられ、その代わりに更に7年仕えることを条件とされた。カモンエスの想定した永遠の愛の方が詩的であろう。) コールリッジにおいても、14年仕えてのちラケルを得ることになると見た方が理解しやすいが、それにしても10年目の心変わりとは何を意味するのか。人のよいギルマン夫人には気の毒であるが、これは詩人の狡猾な自己韜晦であろう。

コールリッジが、のちにワーズワース夫人となったメアリー・ハッチンソン (Mary Hutchinson) 及びその妹のセアラと初めて会ったのは1799年のことである。彼はすでに1795年に、同名のセアラ・フリッカー (Fricker) と結婚していたが、琴瑟相和さぬ不幸はすでに兆していた。妻子を、この結婚に少しは責任のある義兄のサウジー (Southey) に預けっぱなしのまま、新しいセアラとの動きの取れぬ恋愛は一目会ったその日から、およそ10年も続き、苦渋にみちた教々の詩篇 ('Asra' Poems) を生む。有名な「失意のオード」('Dejection: An Ode') の原形である 'A Letter to [Sara]' が成ったのは、1802年4月4日である。1804年から6年にかけて、健康の回復のためと、セアラへの実らぬ恋を諦めるべく、マルタ島逗留を手初めに、地中海地方への旅に立って帰らない。1806年に再びセアラの前に現われたコールリッジに昔日の倅はなく、阿片に蝕まれたその抜けがらにすぎない。再び二人の苦しみの日々が始まり、コールリッジの妄想、嫉妬はつのる。セアラが最終的にコールリッジから離れて行くのは1810年の頃である。1807年頃のノートブックに書き込まれた次のラテン語のエレジー (elegiac pentameter) が

‘Asra’ 詩篇の最後かもしれない。

Ad Vilmum Axiologum<sup>1)</sup>

Me n’Asrae perferre jubes oblivia? at Asrae

Me aversos oculos posse videre meae?...

Ah pereat, qui, ni perdit, amare potest!

Quid deceat, quid non, videant quibus integra mens est:

Vixi! vivit adhuc immemor Asra mei.

ウィリアム・ワーズワースに

君はぼくにアスラに忘れられて耐えよというのか。そしてぼくのアスラの眼がぼくからそむけられるのを見ることができるようになればと。…ああ、狂おしい思いもなく愛せるものは滅びるがよい。何がまともであるかないかは、心の全き人が見るがよい。私は生きおえた。なのにアスラは私のことも思わず生きつづける。

10年という数字にこだわるのは、1809年前後のノートブックの記事に、10年の愛を語る例が見られるからでもある。

おお、サラ (ΣΑΡΑ) よ、サラよ——どんな女性もかつて愛されたことがないほどの愛で、10年間君を愛してきた男をあざむく<sup>2)</sup>とは、君は何ということをしたのか...

これはコーバーンが1808年とも、1810年とも決めかねているものであるが、次の例ははっきりと1810年に属する。

.....10年の間、健康にも病気にも、喜びにも、共にいても離れても.....私は天使に言っても恥じないように、愛してきたのだ。<sup>3)</sup>

1) *Notebooks*, vol. 2, No. 3231.

Axiologus とはギリシャ語の Ἀξιόλογος (=worth-word) で「注目すべき、立派な」の意。

2) *Notebooks* vol. 2, No. 3033.

3) *Ibid.* vol. 3, No. 4006.

それから15年ののち、この10年間の苦しみをこめて、歌にならぬ歌をノートブックに書き留めさせたのは、立ち帰る春の先触れのようなうらかな1日が呼び覚ます、悔い多い青春の思い出であったろう。しかし「ただひとり安閑としている」「現代のヤコブ」は、14年間ラケルの父に仕えつづけたヤコブとどこが似ているのか。似ていないことこそ現代的なる所以であるのか。そういえばヤコブは一種の重婚をしたのに、現代のヤコブは10年間、妻子と別居しても離婚もなしえず、恋人とは重婚どころか、恐らく姦通も犯しえぬままで阿片に耽っていく。

コールリッジはセアラ・ハッチンスンのことを、同名の妻と区別するために Asra というアナグラムで呼んでいるが、偶然ながらハイネに「アスラびと」と題する短詩があるので引いておく。

#### DER ASRA

TÄGLICH ging die wunderschöne  
Sultanstochter auf und nieder  
Um die Abendzeit am Springbrunn,  
Wo die weißen Wasser plätschern.

Täglich stand der junge Sklave  
Um die Abendzeit am Springbrunn,  
Wo die weißen Wasser plätschern;  
Täglich ward er bleich und bleicher.

Eines Abends trat die Fürstin  
Auf ihn zu mit raschen Worten:  
Deinen Namen will ich wissen,  
Deine Heimat, deine Sippschaft!

Und der Sklave sprach: ich heiße  
Mohamet, ich bin aus Jemen,  
Und mein Stamm sind jene Asra,  
Welche sterben, wenn sie lieben.

## アスラびと

いともみめうるわしいスルタンの姫君は  
夕暮れどき、吹上げのほとり、  
白い水のはねるところに  
日ごとにたもとおるのだった。

夕暮れどき、吹上げのほとり、  
白い水のはねるところに  
若き奴隷は日ごとたたずみ、  
蒼ざめ、日ましに蒼ざめた。

ある夕まぐれ、公女は彼に  
近寄り、あわただしく言葉をかけた。  
「お前の名前を知りたいもの。  
お前の故郷、お前の血筋を。」

奴隷の言うには、「私の名は  
モハメッドと申して、イエーメンの産。  
してわが氏族はかのアスラ、  
恋すれば死ぬという。」

残念ながらこの詩は、1851年の『ロマンツェーロ第1集』で公にされたもので、当のコールリッジはとっくに死んでいる。同じハイネの「哀れなペーター」(‘Der Arme Peter’) にあの哀切な曲を附したシューマンなら、いかほどしみじみとした、いや、鬼気迫る曲に仕上げたことかと思うが、そのシューマンもすでに狂気の境をさまよっていた。プーシキンの簡潔さを持つこの詩は、プーシキン自身がロシア語に訳したならば、原詩に欠ける音楽美をも添ええたであろうか。無駄な空想はさておいて、Asra なる名の典拠を求めて、取り敢えずブロックハウスを引くとする。Asra の項を見ると Odsra を見よとある。Odsra を見ると Odhra を見よ、とある。Odhra を引く

と、正しくは'Udhra とあって、「ハイネでは Asra となっている。アラブの伝承では「恋すれば死ぬ氏族」とあるだけで、ぐるぐる引っぱりまわされて元へ戻るから *encyclopedia* というのだろーと思いたくなる。実は探究の方向を間違えていたのであって、その出典はスタンダールの『恋愛論』第2巻53章の断章の次の対話である。

アグバの息子サヒドがある日、アラブ人に尋ねた。お前は何族のものか。——私は愛すると死ぬという種族のものです。——ではお前はアズラ (Azra) 族のものだな、とサヒドは重ねて言った。カアバの主にかけて、そうです、とアラブ人は答えた。

しかしこの『恋愛論』も1822年の刊行なので、コールリッジの役には立たない。ただ、スタンダールにこの知識を授けたクロード・フォリエル (Fauriel, 1772—1844) という民族学者はコールリッジと同年なので、何かその元の資料を両人が共通に知っていたこともありえないではないが、これも無駄な探索だったようである。ただ、コールリッジのロマン的な宿命の愛に側面からの光を投げかけることにはなろう。

さて、コールリッジの詩に戻って「望みなき仕事」の部分からは、「クーブラ・カーン」における想像力の挫折を思い起こすことはできても、ヤコブよりラケルへの訴えを読み取ることは無理であって、むしろそのことは “I speak in figures” に始まる次節によりよく表明されていると思われるが、この部分を最初の部分との関係でどう取ればよいのか。「種々の実験的な改稿」(コーバーン)とか、「韻文による注釈あるいはあとからの思い付き」(E. H. コールリッジ)と見なされ、詩の本来の部分とは見られていない。しかしコールリッジが「現代のヤコブ」と署名したのは、この第2スタンザ<sup>1)</sup>(と敢えて呼ぼう)の末尾にであり、ここにこそヤコブ：ラケル＝コールリッジ：アスラの関係が現われている。合わせ鏡の比喩における「妹分なる鏡」が、コ

1) これもソネットの行教になろうと努力しているように見える。

ーバーンやアダア (Adair)<sup>1)</sup>の考えているギルマン夫人ではなくて、アスラを指し、私=私の信=鏡がコールリッジ自身であることは、すでに明らかと思われる。そして「ただ一人いとしき人の信への信」とは、いかにも合わせ鏡的な、閉鎖・完結した世界である。そして第1スタンザ（つまりいわゆるソネット部分）が希望の喪失を歌ったように、このスタンザは信の喪失を歌っているが、その背後に見えているのは暗黙の、愛の喪失である。この詩の書簡体の前書きには次の一節がある。

年をとるにつれて……われわれが世の中を愛さなくなればなるほど、世の中に構うようになり、世の中の見せかけを重じる理由がなくなればなくなるほど、それらを気にかける……また愛とは、それ自らに対する変化以外のあらゆる変化に生きのび、その反射像の喪失以外のあらゆる喪失に生きのびることのできるものなのに、愛がわれわれを慰めるために一そう必要とされるほど、(愛のみがそれをできるというのに) われわれはますます愛なきものとなる。……

晩年のコールリッジはパウロの「神学的徳」である信仰、希望、愛を人間的な次元で、さまざまなヴェアリエーションにおいて用いている。例えば1829年の「教育における愛と希望と忍耐」(‘Love, Hope, and Patience in Education’) は晩年通有のアレゴリーに堕した詩であるが、ここでは信・愛・希望の三角形の1角が信から忍耐に入れ替わっているのみでない。最後の数行を引用すると、

Thus Love repays to Hope what Hope first gave to Love.

Yet haply there will come a weary day,

When overtask'd at length

Both Love and Hope beneath the load give way.

Then with a statue's smile,<sup>2)</sup> a statue's strength,

1) P. M. Adair, *The Waking Dream*, p.229.

2) このイメージの出所はシェイクスピアの『十二夜』である。

She sat like Patience on a monument, Smiling at grief. (II, iv, 112f.)

Stands the mute sister, Patience, nothing loth,  
And both supporting does the work of both.

かくて希望が初め愛に与えたものを、愛が希望に返して酬いる。

だが多分、遂には余りの負担に耐えかねて、

愛も希望もともに

重荷のもとに屈する辛い日が来るであろう。

そのとき、石像のほほ笑みと石像の力強さで、

無言の妹、忍耐が何一ついということなく立ち、

二人を支えて、二人の代わりを努めるであろう。

「たといわたしが、人々の言葉や御使<sup>みつかい</sup>たちの言葉をもって語っても……」に始まり、「このように、いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちで最も大いなるものは愛である」で終わる、有名な「コリント人への第一の手紙」第13章を思い起こそう。次の章句はコールリッジの心にどのように痛切に響いたであろう。

4. 愛はよく耐え ( $\mu\alpha\kappa\rho\omicron\upsilon\mu\epsilon\iota$ <sup>1)</sup>), 情深い。……

7. [愛は] すべてを忍び ( $\sigma\tau\epsilon\gamma\epsilon\iota$ ), すべてを信じ, すべてを望み, すべてを耐える ( $\iota\pi\omicron\mu\acute{\epsilon}\nu\epsilon\iota$ ).

結局最後まで「存続する」ものは、パウロによって実体化 (hypostatize) されなかったけれど、すべてを支えている忍耐 ( $\iota\pi\omicron\mu\omicron\nu\eta$ ) ではなかったか—コールリッジにとってもシモーン・ヴェイユにとっても。歿年の1834年7月10日に甥の E. N. コールリッジによって書き留められた 'Euthanasia' (「安

1) 邦訳聖書は「愛は寛容であり、……」とあるが、A. V. は 'Love suffereth long,' Vulgata は 'Caritas patiens est,' ルッター訳は 'Die Liebe ist langmütig,' ロシア語訳 'Любовь долготерпит'

2) *Table Talk*, OUP, p. 313.

らかな死) なる1文において、愛の消去は完了する。

私は死のうとしている。しかし速かに解放される期待もない。ごく最近になって、過ぎし日々の映像や幼い頃の情景が、青春と希望の香料の島から吹き通うそよ風のように私の心のうちに忍び入るのは不思議ではないか。青春と希望こそこの幻の世の中での双子なす実在なのだ。愛をつけ加えることはせぬ——なぜなら愛とは青春と希望とが抱き合って一体と見られたものに他ならない。私は実在を複教というけれども、実在とは『イーリアス』から夢に至るまで、度合いの問題である。なぜなら夢もまたゼウスから来るのだ(καὶ γὰρ τ' ὄναρ ἐκ Διὸς ἔστω)<sup>1)</sup>。だが、厳密な意味では、実在とは天が下の何もののをも全く賓述しえないものである。……

だが、まだこの詩の解明は終わっていない。第3節に進む前に pheere という言葉に触れておこう。コールリッジの前書きにこうある。

……春を早まったこの暖かでうらかな日が次の詩のさそい水となったという前に、伴侶、仲間、片割れを意味する pheer または phere はスペンサーやハーバートや、総じて王政復古(1660年)以前に書いた詩人たちがよく用いた語であることに注意を促す以外、何もつけ加えることはないと思います。

コールリッジはハーバートを念頭において言っているらしいが、それは多分記憶違いであり、pheer, fere その他いかなる形でもハーバートには現われないようである。また18世紀でもバーンズは fiere の形で用いているが、これはすでに一種のスコットランド方言であろう。要するにコールリッジはここで、かなり重い意味をこめて用いているらしい。

さて、最後の未完の節(殆ど句読点さえない)は同じ主題の言い直しと見られるが、前節で世界＝くもの喩えを発展させるつもりだったのが、鏡の比喩が前面に出て中断されたためのやり直しであろう。ここではくもの巢のイメージが発展して、閉所恐怖症的な「インドの森の網」と言われているのは、

1) *Ilias* I, 63.



banyan (榕樹, がじゅまる) の木のことに違いない。ミルトンの『失樂園』において「いちじくの木」と呼ばれているのがそれである。

The Figtree, not that kind for Fruit renown'd,<sup>1)</sup>  
 But such as at this day to *Indians* known  
 In *Malabar* or *Decan* spreads her Armes  
 Braunching so broad and long, that in the ground  
 The bended Twigs take root, and Daughters grow  
 About the Mother Tree, a Pillard shade  
 High overarch't, and echoing Walks between; ...

いちじくの木, といっても果実で有名なそれではなくて,  
 今にいたるもインドの人びとに知られているもので,  
 マラバルやデカンで腕を広げるように,  
 枝を広く, 長く伸ばしては, 地面に  
 たわんだ小枝が根を下ろし, 母の木のまわりに  
 娘たちが生い立って, 高いアーチにおおわれた  
 柱列の木蔭をなし, 間はこだまする散歩道。

しかしコーバーンはミルトンについては何一つ触れず, 「最後のスタンザのインドの森, 多分有毒な<sup>2)</sup>」とのみ, 理由も示さずに記している。コールリッジの意識の底にそのような森をなす毒の木が潜んでいたとすれば, プーシキン  
 の有名な「アンチャール」(‘Анчар’) にまで生長することになるエラズマス・  
 ・ダーウィンの「ユーパスの木」である。この木はインドではなく, ジャワ  
 島にただ1本生えているという。

Fierce in dread silence on the blasted heath<sup>3)</sup>  
 Fell UPAS sits, the HYDRA-TREE of death.

1) *Paradise Lost*, ix, 1101ff.

2) *Op. cit.*, p. 425

3) *The Loves of the Plants*, III, 237ff.

Lo! from one root, the envenom'd soil below,  
A thousand vegetative serpents grow;...

恐ろしいしじまの中、枯れ果てた荒野にただけしくも、  
死のヒドラの木、むごきユーパスが坐っている。  
見よ、毒された土の下、一本の根から  
千本もの繁茂する蛇が伸びてくる。

以下20行近く、ますますおどろおどろしい描写が続く。ダーウィンのこの長詩『植物の恋愛』(*The Loves of the Plants*, 1789) をコールリッジが若い頃に読んでいないはずはない。いつの間にか、パンヤンとユーパスの木が心の底で合体し、アダムとイブが陰部を隠すためにその葉を使った木が、毒の木と化していたのである。この毒の木がコールリッジの心の中にも根をおろさなかったとすれば、それはあまりにもやさしすぎる心の故であった。

It is a poison-tree, that pierced to the inmost  
Weeps only tears of poison!<sup>1)</sup>

(傲慢で陰気な心の悔恨は、奥深く突き刺せば、ただ毒の涙を注ぐばかりの毒の木だ。)

最後に参考のために、ハーバートの「仕事」を、散文訳とともに添えておく。

# EMPLOYMENT

If, as a flowre doth spread and die,  
Thou wouldst extend me to some good,  
Before I were by frost's extremitie  
Nipt in the bud;

The sweetnesse and the praise were Thine,

---

1) *Remorse*, I, i, 23f.

But the extension and the room  
Which in Thy garland I should fill were mine  
At Thy great doom.

For as Thou dost impart Thy grace,  
The greater shall our glorie be;  
The measure of our joyes is in this place,  
The stuffe with Thee.

Let me not languish, then, and spend  
A life as barren to Thy praise  
As is the dust to which that life doth tend,  
But with delaies.

All things are busie; onely I  
Neither bring hony with the bees,  
Nor flowres to make that, nor the husbandrie  
To water these.

I am no link of Thy great chain,  
But all my companie is a weed.  
Lord, place me in Thy consort; give one strain  
To my poore reed.

### 仕事

もしも、花が広がってから枯れ死ぬように、私が寒気の余りの厳しさのため、  
つぼみのままに枯れてしまわぬうちに、私を何らか益へと伸ばしてくださるなら、

その香りと讃美とはあなたのものとなるでしょう。しかしあなたの花環の中  
で私が充たす延長と、空間とは、あなたの偉大なる審判において、私のものとな  
るでしょう。

というのは、あなたが恩寵を授けてくださるに应じて、私たちの栄光は大きくなることでしょうから。私たちの喜びの尺度はこの世にあり、その内実はあなたのもとにあるのです。

それなら私が衰えて、あなたの讚美に乏しいのちを、そのいのちが向かう死の塵のように不毛に、ただぐずぐずと費さすまにさせないでください。

ものみは忙しい。ただ私だけは蜜蜂たちともに蜜を捧げもせず、蜜を造る花も、花に水をやる勤労も捧げません。

私はあなたの偉大な鎖の環の一つでなくて、仲間といえは雑草だけです。主よ、私をあなたの合奏の中に加えてください。私の哀れな革笛にひと節を与えてください。